

第1回瑞浪市道の駅検討委員会

<議事要旨>

日時：令和2年9月3日（木）午前10時～

場所：瑞浪市役所2階大会議室

出席委員：東恵理子、足立美樹、足立亘、伊藤加代子、伊藤雅敏、口石大樹、小木曾実希
出村嘉史、橋本孝晴、原田守啓、平尾巖、水野吉衛、溝口純司
（五十音順、敬称略）

欠席委員：伊藤太一（敬称略）

アドバイザー：岐阜県東濃県事務所長 尾崎浩之、岐阜県多治見土木事務所長 加藤一幸（敬称略）

オブザーバー：国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所 計画課長 野村博（敬称略）

事務局：瑞浪市 建設部 都市計画課

■会議概要

（※議事要旨の発言者は、学識経験者の原田会長・出村委員のみ表示）

1. 開会

2. 委員委嘱式

3. 市長あいさつ

市長 昨年は、道の駅を未来の拠点として活用できるような基本構想をまとめていただいた。国交省の方では、国道19号瑞浪恵那道路を、単なる通過道路ではなく、ストック効果、経済効果も発揮できる道路とすることを課題として投げかけられている。釜戸地区と大湫地区は連携を取っているため、道の駅ができることによって大湫町の発展にもつながると思っている。意欲のある人を発掘しながら、知恵を出し合い、瑞浪・釜戸ならではの道の駅になるような、基本計画の策定をお願いしたい。

4. 会長・副会長の選出

事務局 会長には原田委員、副会長には伊藤雅敏委員を推薦する。

一 同 異議なし。

5. 会長あいさつ

会長 今回の委員会は、基本計画をまとめながら、地域の方々と手を取り合って新しいアクションを生み出していく機会になるだろうと考えている。道の駅の計画場所はおそらく生活の拠点だけでなく、防災の拠点として価値の高い場所となると考えている。基本計画は、基本構想を引

き継いでより具体化していくという事で、皆様には様々な立場から忌憚ない意見をいただきたい。

6. 議事

- ・ 議事に先立ち、事務局より資料3の説明を行った。

(1) 道の駅について

- ・ 事務局より資料4の説明を行った。

会 長 4ページに第3ステージの説明があるが、前回の検討委員会で議論してきた基本構想が同じような趣旨になってきている。道の駅は道路利用者のためだけでなく、地域の魅力を引き出してくれるものといえる。国もこのような方針で地域を応援しているということで委員の方にはご理解いただきたい。

(2) 瑞浪市道の駅の基本構想について

- ・ 事務局より道の駅基本構想の説明を行った。

出村委員 基本構想策定の際は、道の駅にどんな施設・機能を導入するかという議論があり、今までにないものを作りたいという事であった。構想としてまとめたのが「よろず屋」であるが、具体的にどういうものか示されていない。どちらかという古びたイメージがあるが、この時に議論していたのは、様々なものが展開し、コトが起こり、地元の人々の生活拠点になり、生活雑貨のような地元の人が助かるものが置いてあるなど、いろいろセレクトされたものがあるというイメージであった。このイメージがカギになる。「これがよろず屋である」という定義をいかにするかということである。

基本構想で議論した後にコロナショックがあり、世の中のあり方が大きく変わり、インバウンドはあてにできない状況である。観光的なことを目指すなら、何のためにやるのかという議論は必要になる。ローカルツーリズムという、地元に近い人が楽しむということに、全国的・世界的にも視点が動いている印象を受ける。そういう向きの拠点としてよろず屋を考えるとよい。

また、空間構成について検討中となっているが、この周辺は緩やかな地形で、歩くととても良いところである。開発して姿を大きく作り変えようと力まずに、よく地形を読むという作業をさらに行う必要がある。道の駅という制約の中から、車がどうアプローチするかが焦点になるが、車のアプローチが今の地形を壊してはいけない。初めからそこにあったかのように収めるという高度な議論が必要である。国土交通省や、県におかれては、今までの枠にとらわれず、ニューノーマルの時代なのでそういうもののお手本をここに作るようなかたちで、「やりすぎない美しさ」をどう出すかというのがひとつのハードの課題だと思う。重い課題でもあるのでお力添えをいただきたい。

委 員 コロナはインフルエンザのように2027年には共存できる状況になっていると思う。観光産業は非常に重要な産業だが、瑞浪市の観光協会は他の東濃5市に比べて動いていない状況である。地域の循環も大切だが、外貨を取り入れることが非常に大事だと考えるの

で、運営体制の案について釜戸の将来ビジョン協議会が設置されているが、観光協会とのかかり方はどのようなかをお聞きしたい。

委員長 議事の6で地元組織の動きについて説明があるので、回答は後ほどでもよいか。
委員 これからの観光業は、箱モノを作るのではなく、日常を非日常にして観光客を取り入れていくということを捉える必要がある。道の駅が観光の拠点になると思っているので、それを踏まえて観光協会との関りを後ほど回答いただきたい。

委員 基本構想では、温浴施設は作らないということになっているが、地元組織のかまどベースの中で、温泉は無理でも足湯はどうかという議論が出ている。そういうものを再度検討材料にあげるのは可能か。また、地元から農産物の販売を期待する声を聞いている。構想ではきなあたとの共存共栄を目指すということがあるが、道の駅では農産物の販売は行わないということなのか。構想策定時にはどの辺りまで検討がされたか再確認したい。

委員長 事務局から説明願います。
事務局 温浴施設については、基本構想を取りまとめる中で一つの核として提案をした。他の類似施設にヒアリング・現状を確認したが、維持管理だけでも大変な状況という事で、経済的な面から初期の段階では導入しないと結論付けた。しかし、足湯については導入費用も少なく、集客効果も見込めると考えられるので、今後基本計画を策定する中で、意見を伺いながら検討する。

農産物直売所については、基本構想策定の初期の段階から丁寧に議論を重ねてきた。初期の段階ではきなあたと競合するので導入しないという方向になったが、きなあたとの共存共栄は必ず必要になるので、きなあとの経営状況とか農産物の納入状況を見ながら引き続き検討していきたい。

委員 検討の余地は十分に残っていると理解した。
委員長 箱モノを作るというよりは、誰がどのように関わって、外部からの補助金に頼らずにやっけていけるものを実現していくかを慎重に議論した。地域の人が最初から関わりをもつことを前提に計画されているというのがポイントである。

委員 アンケートで、釜戸町に魅力がないとか住みよいかと感じないとか、今後住みたいと思う人が少ないという意見がみられるが、実際はそんなことはないという話が基本構想で出た。今、地元の組織として我々30代のメンバーを中心に、いかに地元を盛りあげるか、熱い思いを持っているメンバーがそろって活動し始めている。もっとかかわりたいと思っている人もいるので、いろんな人を巻き込んでほかにはない道の駅にしていきたい。

委員長 基本構想は1年前に策定しているが、この1年の間にいろんなことが起きている。議事の6にあるが、地域のほうでもいろいろ準備をされている。

委員 私の家は釜戸町の平山で酪農兼専業農家をしている。今ある牛小屋を活用して何をしたらいいかを考えており、あと3年ほどしたらジャージー牛を飼い始めて、平山の牧草地でチーズやジェラートを提供するカフェなどができたらよいと考えている。道の駅と連携できたらいいと思っている。

今の釜戸町は、買い物にも困るし、中学校もなくなり、子育てに少し厳しい面もあるが、住みよい町だと思う。子育てするのに最高の場所なので、良さを若い女性にわかってもらえる

ような道の駅になったらいいと思っている。

会 長 基本構想が策定された際には、地域からかかわってくれる人材が出てくるか心配していたが、前向きなムードになってきていると感じる。

(3)・(4) 基本計画策定に関する検討事項及び検討スケジュールについて

・事務局より資料6、7の説明を行った。

会 長 この検討委員会で議論が必要になるのは、施設へ導入する機能のほかに、周辺道路からのアクセス方法の整理がある。道路と敷地や駐車場をどのようにつなげるかが、道路利用者の利便性だけでなく、歩行者や自転車利用者にとっても重要になる。道路と敷地のつなげ方によって、土地利用の骨格が決まるので丁寧な議論が必要である。

基本計画の策定が終わった時点で、そのまま設計に取り掛かれるような、あらかじめのイメージが出来ている所まで精度を上げることになる。

P 8、9について、道の駅の枠組み部分とそれ以外の部分がある。検討委員会ではどこまでを議論するのか。公共施設の集約化も含めた議論なのか。

事 務 局 公共施設の集約エリアは、老朽化や防災上の課題がある釜戸コミュニティーセンターや竜吟幼稚園の移転候補地としている。市が作成している公共施設等総合管理計画の中でもこのような議論がなされている。検討委員会では、道の駅周辺に公共施設が集約される可能性があることを念頭に置きながら、道の駅について議論していただきたい。

会 長 公共施設の集約化の部分は、市においてそのような構想があることを念頭に置きつつ、道の駅の枠組みの中で議論をする。

委 員 道の駅というのは、トイレ休憩やその辺の産物を見て帰るところが多い印象である。個人的には、釜戸地区や、近隣の武並には気軽に利用できる温浴施設がないので、高齢化社会が進む中で、高齢者だけでなく若い人たちが集まれるような温浴施設を備えた道の駅がいいと思っていた。道路や交差点ができて生活が便利になるだけでなく、地域の人も楽しめる道の駅になるといいと思っている。若い人たちがキャンピングカーで訪れたり、河川の利用を楽しむなど、自然と触れ合える施設と小規模な温浴施設も備えた、地域の人も楽しめる施設が良いと思う。温浴施設は資金面で難しいようだが、子供から高齢者までみんなが楽しめる、目的地として来ていただける、地域の人も集まって来られる場所となり、さらに公共施設も付近に集約されれば、ひとつのまちづくりの形になると思う。

きなあたのとの関係もどのようにしていくか含めながら、将来的に釜戸町だけの問題ではなく、瑞浪市全体のひとつの拠点として、同じ国道沿いを利用するという視点で考えていきたい。

会 長 きなあたのとの相乗効果が大切になると考える。

委 員 東美濃ビアワークスという、クラフトビールの会社を立ち上げた。地元のアンケート結果については回答者が25名であり、町民の総意ではないので、釜戸にも可能性はあると思う。地元の思いも大事だが、周辺地域だけでは人口が少ないので、県外の方や、お金をとれる商圈のことも考える必要がある。導入機能について、何で稼いでいくのか、コンテンツも大切になる。ほかのところにない地域資源、外からくる商圈になる人たちのニーズを入れていか

なければいけない。まちとともに育つ道の駅というコンセプトで、町も育っていかなくちゃいけないと思うが、現在町は衰退傾向にあるので、その中でまちが育つというのは他の人から見て魅力の部分の商材にしていかなければいけない。私自身は、美濃焼の魅力を伝えるために、職人と一緒に地ビールを作って、五平餅などと組み合わせて販売したいと考えているが、今ある地域資源をどう観光コンテンツや商材にしていけるかが大切になると思う。

出村委員 インバウンドという言葉の使い方について、私が「インバウンド」を使う場合は、否定的な意味を持っている。たくさんの人を箱詰めにして運んで来て買わせる、そして追い返すという、今までやってきた観光に対する批判である。インバウンドの本当の解釈は入港という意味。外の商圏を見ているのがインバウンドであり、広い意味でとらえればインバウンドはまだ生きてる。

これから質を高めていく必要があるのが、それぞれの地方地域で大事だと思われ、やり始めていた、「コトを売る」というコンテンツを作るスタイル。大量のお客さんにそのまま売るといよりは、日本の中のもっと近場、東海圏など車で来られるところを相手にする。そういう商圏を狙うのは筋である。道の駅は、インフラ付きで、広域からお客さんを運んでくるという国交省の目玉事業であり、そこは利用しなければいけない。

何を売るかというときに地元製だと思うが、釜戸にこだわりすぎているかもしれない。釜戸は一つのブランドとして名を馳せていってほしい。ただし、何で名を馳せるかという、「東濃のものがすべてそこに集まっているから」というスタンスで十分である。東濃全体をみれば、コンテンツはたくさんある。これまで地域に足りなかったのは編集する力であり、クリエイティブ部門が足りなかった。物はたくさんあるが売り方を知らない状態。大手企業はクリエイティブ部門を大切にしているので、パッケージ化して売るノウハウを持っている。地元はそれが無いので外部のコンサルに任せてしまう、という状況を打開しなければいけない。行政ではパッケージ化はできない。運営について、公民連携は当たり前だが、法人化という選択肢がある。法人化して利益を上げることに抵抗を感じるかもしれないが、その法人をいかにパブリックな組織にしていけるか、仕組みを考えなければいけない。民間で営利事業としてやるPFI方式がいいと思う。ただし、テストマーケティングを繰り返し行っていく必要がある。組織が育つのにもっと時間が必要。

委員 おっしゃる通りだと思う。自力で利益を上げないと、存続していけない。行政に頼っていては将来的に存続ができない。核になるのは収益を上げること。いかによそからのお金を稼いで自力で運営ができ、企業として成り立つものにしていくのが重要。

(5) 計画地の地形的特徴について

・原田会長より説明を行った。

会長 道の駅計画地は、土岐川に面しているほうが低くなっており、南側が1段高くなっている河岸段丘である。高低差があるところで9メートルほどあり、防災上重要なポイントである。浸水想定の研究の途中の段階ではあるが、南側の段丘では浸水は想定されない安全な土地で、防災の優良な拠点になり得る場所である。

土岐川も佐々良木川も良い川である。水辺をこの場所の魅力とし、周りの景観を含めて自然

豊かな良い場所なので、場所の魅力も引き出す計画にしたい。

(6) 地元組織の活動について

・事務局より資料8の説明を行った。

会 長 かまどベースの活動と検討委員会との関係性はどのように考えればよいか。

事務局 検討委員会に対して、道の駅の使い方の提案をしたい。イベント広場としての使い方や連携としての施設の使い方などを提案してもらいたい。

会 長 かまどベースからの提案も前提として、計画に反映できるかどうか検討委員会で客観性を持って議論するという事によろしいか。

事務局 はい。

委 員 かまどベースに参加しているが、元気の出ってくるチームになっているので、かかわりを楽しみにしている。今日の委員会の皆さんの発言が的確だったと思う。基本構想はできているが、もう一度構想を新たな視点から見て、肉付けをしていくというような感覚を持って、今回の委員会を運営してってもらいたい。

委 員 人口が減少してきているので、高齢化少子化の中で道の駅をまちづくりの行事の一環として活用していきたい。道の駅で釜戸周辺の観光地のPR・魅力の発信ができれば効果があるのではないかと考えている。ひとつひとつ魅力を発信していき、住みたいと思う人が増え、住民が増えればよいと考えている。

委 員 かまどベースは、「釜戸から発信していこう」という思いである。釜戸にできる瑞浪の道の駅なので、瑞浪全体を考えていかなければいけない。この場所から稲津や陶、屏風山にも登ろうという観光の拠点になると考えている。地元組織の中でも、様々な意見が出されている。地域として、どのように継続していけるか考えたい。3月までに基本計画策定ということだが、それまでに十分な議論ができるか不安な面もある。

委 員 基本構想策定時にも述べたが、川などの地域資源を活用してほしい。地形に高低差があれば、上平用水を使って水車等できるのではないかと期待している。農地も活用資源に挙げられると思う。かまどベースについて、「やってみて改善しよう、とにかくやってみよう」というのはいいことだと思う。

委 員 今回計画している道の駅は、JRの駅に非常に近いところにあるのが、他の道の駅と異なる点である。車を前提にするだけでなく、電車を降りて、歩いて来る人も集客の対象になる。釜戸駅を降りた人を対象に調査するのもよいと思う。

以前、中京高校の生徒さんのワーキンググループが、大湫の観光資源について発表された。人口は減っているが、観光資源は豊富にあるということで、開発できるのではないかと高校生の目線でも言っていたので、どのようなところが受けるのか、違った目線で見ると、活用の仕方が広がると思う。

運営方法について、特に資金面においてPFIでの運営は難しいのではないかとと思われる。第3セクター方式で、運営を民間に任せるとするのが、今の時点での妥当なところではないか。また、これまでの経験から、交差点の信号に近いところに車の出入り口があると、大概失敗しているように思う。車の入り口については、交差点から遠い配置のほうがよいのでは

ないか。観光バスも入れるように検討が必要。

委員 釜戸出身なので楽しみにしています。

会長 地元からの盛り上げていただきたい。議事は以上。

事務局 今回は初回の委員会という事で、委員の皆様お一人お一人の道の駅に対する思いや意見を伺うことができた。今後も、この検討委員会を通じて、開かれた議論の中で基本計画をまとめていきたいと思っている。

7. 閉会

以上